

近頃の企業は、機会原価の測定に乗り出した。周知のように、会社が採用してきた以外の、ある計画、あるポリシーをとれば、当然えられたであろう利益を、その方法をとらなかつたばかりに、失った損失を機会原価という。会社はこういう損失を測定するため、日々の取引記録以外に、これまで作成されなかつたような記録まで作成されるように計画されてきた。

1

関東大震災の翌年（大正十三年）私の入学した横浜高等商業学校は、急造のブラック校舎で横浜高等工業学校と相住いした。相住いといっても、数年先きに開校した「高工」の校舎を「高商」が間借りした状態であつた。

そこで図書館も「高工」と共通であつた。今にして思えば、すべて焼失したあとの貧弱な図書館であつたが、ここでは学生が自由に出入して、書架にある図書は勝手にとり出して、勝手に利用してよろしい。済んだらもとの所へ返しておく。閲覧カードの記入もなければ、なんの手続きもいらぬ。私はこの時代ほど図書館を利用したことがない。

なお、また「高工」では学期試験が一切行なわれていないことを知るに及んで、だんだん「高工」が羨しくなつてきた。その「高工」の校長が鈴木達治先生であることも、あとで分つた。先生が樽のような短軀を学校に運ばれるお姿を、校庭で数回お見受けした。

鈴木先生と私の交渉はこれで終つた。一度も直接先生の声咳に接したこともなければ、挨拶をしたことも

ない。相住いは一年で終つた。しかし生意氣盛りの吾等他校の学生間にも、その後鈴木先生の偉大さがつたわつていた。

2

さて昭和六、七年頃、南部の学舎を出て、私が岩倉の教壇に立つようになってから、はじめて鈴木先生が同志社の大先輩であることを知つた。またその後ますます偉大な業績を、教育界に積んでいられる噂が私の耳朶にも響いてきた。当時の日本は、日増しに破局に突入する準備を進めて行つた。ご承知の通り同志社も苦難の道をたどらなければならなかつた。

その頃（いつであつたかさだかに覚えていないが）同志社が総長難に当面して、鈴木先生をお迎えしようとした。ところが「自分は横浜の土になる」といつてキツパリ拒絶されたという噂を聞いた。（噂であるから保証の限りでないが）私はこれをきいて、なぜか知らん、先生は矢張り「偉いんだな」と思つた。

3

その後、ある日のこと研究室に配られた同志社タイムス（第九二号、昭和三年五月二八日）に磯田義治



氏の「鈴木達治先生訪問記」が写真入りで報じられていた。その一節に先生の談として、

「教育を徹底させるためには、同じ専門を講じるにしても兼職する事はさけない。それから教育の場所の周辺にあって、日夜に人と人物に接触を重ねる汽車や電車で通勤しては効果の徹底は困難に近い」

と喝破された記事が載っている。なんときびしい言葉であろう。ところが悲しいかな、私は長い間先生の真意をくみとることが、できなかった。必ずや黄色い喉をして「それでは貧乏人は学問はできませんね」等々右のようなお言葉は老人の世迷いごとしか受けとらなかつたであらう。

およそ「学」に志す程の者は、老いも若きも、貧しきも、富めるも、雑事にたずさわるることによつて、失われる機会原価の莫大さに、心にいたさなければならぬ。

「同じ専門を講じるにしても兼職することはさけない」とされる先生のご指示を私なりに曲解することをお許し願いたい。

先生は終日青白い顔をして、疲れた身体を研究室に閉じこめよといわれるのではない。遊べ遊べ、休め休め、休養をとつてこそ甫めて勉強ができるのである。終日あるいは週中、スケジュールがギッシリ詰つてい

るようなことでは「事務」はとれても「勉強」はできるものでない。したがって他大学に兼職する場合などには、これによつて失われる機会原価の大きさに心をいたさなければならぬ。これを思えば、現在の1000の十倍位給与されたとしてもなお失われるところは大きいのであるまいか。

4

更に一転して学校法人同志社の失つた機会原価は大きい。一たびこれに思いをいたせば、その損失は測り知るべからざるものがある。

「同志社は折角、創立者が道を開いてくださった同志社看護婦学校も同志社病院も売つて失つた。その同志社病院に僕らは入院したこともありましたが云々」

と話して下さつた古い同志社マンはもう故人になられたか、学校を去つて失なわれた。

いまやわが同志社は九拾週年を迎える準備に忙しい。このときに當つて、そんな遠い昔を偲ばなくとも、昨日、今日と失なつて行く目に視えない機会原価を徹底的に反省しなければならぬ。

それは雖て目にみえる厳しい現実となつて、はね返つてくる。目にみえる幾億の負債よりも、この方が更に恐ろしい。

(商学部教授・監査論)

アラスカ紀行

— その —

北 村 泰 一



今回のアラスカ調査隊の派遣については、学内はもとより学外からも大勢の方々に有形無形の援助を受けた。その一人一人に御礼を申し上げる機会を末だもっていないが、そうした方々への、とりあえずの御礼と報告の意を含めてこの小文を書いた。

学術的な成果については現在鋭意整理中であり、それを含む正式な一般報告書も、四十年六月頃発刊を目標に、現在準備が進んでいる。

アラスカ学術調査隊については、同志社時報一〇号（一九六四年）に、西原隊長の小文が記載されている。併わせて読んで載せたいと希望している。

（写真はベース・キャンプ）

山麓への旅

七月三日、隊長がアンカレッジ (Anchorage) に到着し、これで一行八名全員が揃ったことになる。アンカレッジの街は、あれほどの地震の跡もみせないほどすっかり片附いていて、ここが陥没したあとだと説明されてはじめてそれと気がつき、当時の惨状をしるぶ始末であった。

山麓へ至る第一の根拠点は、アンカレッジより東北へ約三五〇キロの距離にあるガルカナ (Gulkana) というところである。仕事はそこへまず一トン余りの荷を運ぶことにある。幸いにもガルカナへは立派なハイウェイいわゆる Glenn・ハイウェイ (Glenn HWY) が通じているので、トラックによる荷物の輸送が可能である。しかし、アラスカは日本と異って大変な物価高、中でも人件費はペラボールに高い。運転手つきでトラックを借りると一日二五〇ドル (約九万円) を余分にとられる。これではとてもかなわない。多少危険でもわれわれ自身で運転してゆく他はない。幸い長谷川君が免許をもっているのでトラックを借り、その第一歩を踏み出したのは七月四

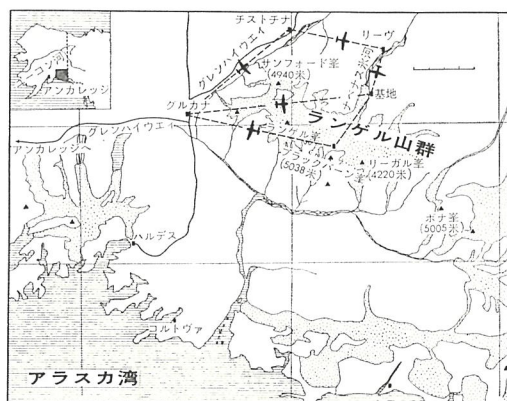
日の早朝であった。

長谷川君の腕は確かなものである。ぐんぐんマイルを稼ぐ。長谷川君は大変有能の士で、西原隊長の氷河研究の助手を勤めるかたわら、隊の事務、現地での交渉その他の万端をきりまわし、一方リーガル登山では登山家としての技量を十分に発揮し、隊ではなくてはならぬ存在であった。この遠征のためには、職を放棄してもという熱血の士でもある。

パルマー (Palmer) を過ぎる頃から道はマタヌスカ (Matanuska) 谿谷に沿って相当な登り坂になる。どんどん高度を稼ぎ谿がやや広くなった頃、左岸より大きな氷河が本流に入っているのが見えた。これが有名なマタヌスカ氷河である。このマタヌスカ氷河は、他の数多い氷とやや趣を異にしている。普通大きな山岳氷河の末端といえ、いわゆるターミナル・モレーン (terminal moraine) で真黒になるほど汚されているものだが、このマタヌスカ氷河は末端まで美しく、折からの陽光にキラキラと輝いていた。隊員たちは初めてみる氷河の美しさに感嘆の声を放っていた。

マタヌスカ氷河をすぎ、シープ山脈 (Sheep Mountains) のスンをまわく山道を二〇キロ進

んだところにある峠をこすと、忽然として大平原が展開される。高度約六〇〇メートル。見渡す限りの湖沼と森林。われわれはアラスカの内地部に歩をふみ入れたのであった。初めてこの地に足をふみ入れた探検家たちの感激をしのびながら、水平線の彼方までただ真直にのびるハイウェイをひた走りに走る。このあたりはほとんど平坦で、小高い岡を上ったり下ったりして道路がついている。



ハイウェーの数カ所で道路拡張工事をやっていた。日本と異なるところは、そこに働らく人影が大変マバラであるということである。ただ巨大な土木工事が数台、甲虫がはうように動いているだけだ。それでいて、一週間後に再びそこを通った時には、ぐんぐん仕事がかどっている様子がみえ、二カ月後の帰途にはすっかり完成していたのには驚ろかされた。日本のように、やたらと人間が多い割合に、工事に日数がかかるのとは大分様子が異なっていた。

いくつかの岡をこえ、ガルカナに着く。ここに大きな飛行場があり、ウィルソン (Jack E. Wilson) とこのブッシュ・パイロット (Bush Pilot) がすんでいる。ブッシュ・パイロットとは、ブッシュ (カン木) のはえているようなところでも、一寸したスペースさえあれば勇敢に離着陸することからこうした名前がついたそうである。いわばその道の野武士的存在である。アラスカは、いまだに狩猟のたしめる数少ない土地の一つで、彼らはそのガイドとして生計をたてている。このアラスカに、ブッシュ・パイロットは数多くいても、スキーをつけて氷河上に離着陸出来るものは

多くはいない。西の方、マッキンレー地方にドン・シェルドン (Don Sheldon) として東のガルカナにこのウィルソンだけだと本人の話である。

このガルカナから、基地になるナベスナ氷河 (Nabesna Gl.) まで直線距離にして約一〇〇キロ、航路にして一六〇キロ以上はある。この間の輸送手段が問題であった。無論、自動車道路などはない。前にも述べたように人件費が誠に高く、ヒマラヤのように人夫を使うわけにはゆかない。というより大体そんな人間はいない。例をあげると、アルバイト白人学生一日三〇ドル (約一〇八〇〇円)、アラスカ大学の日本人助教授一日四三ドル (約一五五〇〇円)、そしてRCAに勤める三五歳位の高級技術者になると一日一三三ドル (約四八〇〇〇円)、全く嘆息が出るような額である。従って、たとえ人間がいるにしても、そんな人間を使うよりも飛行機で輸送する方がずっと安上りで済む。飛行機といってもパイパー・スーパーカブというほんの小さな二人用の小型機である。一人で尾部をひいといと持ち上げて簡単に方向転換出来る程度のものである。

基地はナベスナ氷河の末端より少し下流のオレンジ・ヒル (Orange Hill) と大体の場所の選定はしてあるものの、果してそこが基地として適当か否か、まず偵察してみなくてはならない。ガルカナに着いた日の午後四時頃、隊長と共に偵察に飛び立つ。オレンジ・ヒルまで約一時間の行程。極地の夏の陽は沈まず、上空から見下ろす原野は湖と森林をうまく配合した一幅の絵であった。その中をカッパー河 (Copper River) が原始林を截割するようにしてダクダクたる泥水を流がしている。アラスカは氷河土壌であるのと、この辺は特に火山灰質の土であるので川は大低泥水である。処々の川辺から、泥水があふれ出し、原始林の中へ泥が木を押し倒しながら流れた跡がみえる。パイパーはそうした地上の目印をたよりに進んでゆく。湖で水を飲むムース (Moose)、森林の中を走り去る名も知らぬ動物たち。谷間に苔をはむ山羊 (Mountain Sheep) の群。アラスカの自然は豊かである。ドラム峯 (Mt. Drum, 三六六〇m) サンフオード峯 (Mt. Sanford, 四九五二m) の山麓をぐるりとまわり、ゴート谷 (Goat Valley) に沿ってナベスナ谷に近づく。雲は低く、今

にも雨になりそうな天気であった。

やがて前方に氷河が見えて来た。ターミナル・モレーンで黒く汚れた大きな氷河だ。その手前五キロのところのオレンジ・ヒル、基地予定地だ。軽くバウンドをして着陸する。すぐ水を探す。長い基地生活するのに、まづ何より大切なものであるからだ。蚊が多い。水は十分ほど歩いたところに発見した。しかしここは基地として余り感心しない。ウィルソンにもっと氷河の上流で着陸出来る場所はないかとたずねる。ウィルソンはうなずいてもう一度とび上る。二十分〜三十分ほど上流へいったところへ再び着陸する。高度約一三〇〇メートル。もう肌寒く、むろん蚊もいない。清流がつい傍を流れている。視界悪く、周囲の状況はこれ以上よくわからないが、氷河もつい目の先だしオレンジ・ヒルより遙かによい。よしここだ。こうして基地の位置は定まった。

基地の完成

今夏は、日本からカナダ・アラスカ国境周辺の山岳地域へ数隊の遠征隊が殺到した。関西学院大学、学習院大学、福岡からきた隊の

三隊が、カナダのローガン峯(Mt. Logan, 六〇五四呎)へ、また関西登高会という社会人団体がエライアス峯(J. Elias, 五四九〇呎)へ、といった具合である。この他にもまだあるらしい。この現象は恐らく今春四月から外国観光外貨の枠がはずされたためであろうと考えられる。ところでウィルソンは、これらの隊の輸送をほとんど一手に引受けて輸送をするという。各隊とも輸送の時期はほとんど同時なので、当然諸々の支障が起った。この地域の天候は非常に不安定だ。そして変化が激しい。晴天は数日に一日の割合しかない。その一日を各隊が待ちうけているのであるから、気持ばかり焦って一向に事が進捗しない。

七月五日はこうしてウィルソンはどこかへ飛んでゆき、ついに姿をみせず、われわれは飛行場の一角にテントを張って待機せざるを得なかった。

翌六日もウィルソンは姿をみせない。まだローガンから帰へってこないという。そこで交渉の結果、デーブ(A. H. Davidson)とこの副操縦士にナベスナ氷河の基地の下流、二〇キロのリーヴ飛行場(Reeve Air Field)までパイパーより一まわり大型のセスナー機

で輸送を開始して貰うことになった。ガルカナからリーヴへ直接空輸するのはやや遠すぎる。グレン・ハイウェーをガルカナからなお二時間程北上したところにチストチナ(Chistochina)という元インディアンの部落であったところに飛行場があり、そこからだとガルカナから直接飛ぶより四〇分は短縮される。それ、というわけでチストチナへ走る。その日、荷物と全員がリーヴへ着いたのは夜の十時。曇った空にあたりは漸やくうす暗がりになろうとする頃であった。

七月七日。快晴で絶好の輸送日よりだが、ウィルソンは多分まだローガンへいついてこちらへは来ないだろうと諦める。しばらくすると爆音がして、ビル(Bill Ellis)という三七〜三八歳の男がやってきた。リーヴから数マイル離れたナベスナという部落に住んでいて、ハンティング・ガイドを業としている。このナベスナという部落は一九五二〜五三年頃に銅鉱山の会社が操業を開始したので出来た村落で、あとで述べる同名のナベスナ部落(Nabesna Village)とは異なるものである。ビルは江戸っ子調の甚だ愉快な人物である。そのビルにさそわれ三十分の遊覧飛行



ベース・キャンプ風景

にとび立った。このあたりはナベスナ河の中でも最も川幅の広くなったところで、河幅は五キロはゆっくりにあるであろう。十分ほど飛んだ頃、ビルはしきりと下を指さす。みるとナベスナ河の右岸の、ある三角洲に数軒のインディアン家屋がみえる。きけばインディアン部落の廃墟であり約一〇〇年前に捨てられたものだという。原始林の中にひっそりとたつ廃屋をみおろしながら、ムースやカリブー(Caribou)を狩猟するインディアンの姿等を感じていく。かべたりした。

翌七月八日。早朝にビルがやってきた。ウィルソンと連絡がつき、今日はやってくるだろうと伝えてきた。間もなくウィルソンが飛来する。かれはローガンからついききほど帰ってきてクタクタに疲れている。だからビルに輸送をたのんで自分はこれから帰って寝るという。輸送はその日の午後四時から始まった。夜中でも明るいから心配は要らない。自分が一番機で飛び出す。ナベスナ氷河上空にさしかかる。幅五キロ。その源頭まで全長一五〇キロ以上もあるという巨大な氷河である。世界に名高い巨大な山岳氷河であるカラコルムのバルトロ氷河(Baltoro Gl.)で長さは六〇キロ、さらに長いシアチェン氷河(Siachen Gl.)でさえ七〇キロ位しかない。下流はいたるところクレバス(Crevasse)が口をあけ、大変危険な様相を呈していた。あちこちに氷河湖がみおろせる。約三〇分で基地予定地に着いた。先日とは何という違い！ 先日はガスでわからなかったが、基地予定地は氷河のワキの氷河堆積物で出

来た広々とした平坦地の一隅にあり、眼前には上半分なお雪をいただく無名の前山がそそり立ち、下半分の山腹はなだらかな緑の斜面をもって、遙か彼方でこの平坦地と連らなっている。山肌には谿水が夕日をうけてキラキラとひかり、何ともいえず美しき。この辺は氷河の幅は六・七キロ、山麓の幅は一〇キロはあろうかと思われる。

飛行機が去つてみると、あたりは寂として谿水のせせらぎの音のみ。陽はなお高く空はいやが上にも青い。ふと昭和基地に初上陸した時の気持を思い出す。前山の尾根に見える数個の白い斑点は山羊の群だろうか。

第二便がやってきたのはそれから一時間余り後。続いて第三便、第四便。やつと全部の人間と荷物を運び終えたのは、もはや太陽が空に高い翌朝午前二時頃であった。

こうしてわれわれの四〇日にわたる基地はこのナベスナ氷河の中流に完成された。この地をナンガパルパートの基地になぞらえ、メルヘン・ウィーゼ(Märchen Weise オトギのマキバ)と名づけた。

(工学部講師・天文学)